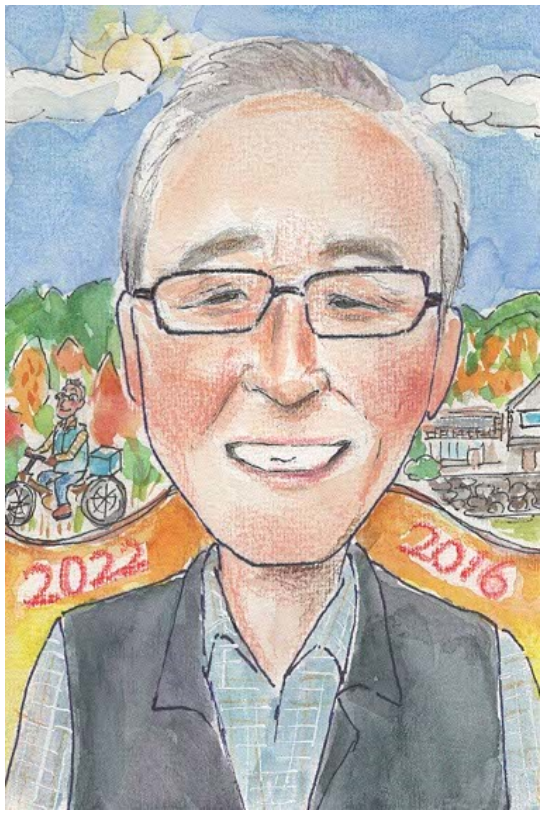
長田下地域自治　振興会だより　第４０号

２０２２年(令和４年)１１月２４日発行

六年間を振り返って

長田下地域自治振興会　前会長　迫　能典



２０１６年（平成２８年）前会長の笹岡氏より会長のバトンを引き受け６年間。地域の皆さんが参加していただける催しを目標に、振興会役員一同が知恵を出し合い取り組んできました。また年々高齢化が進む中、行政の進める生活支援制度にも取り組み、地域の高齢者や閉じこもりがちな一人暮らしの方の見守り活動も進めてきました。

走り続けた長田下地域自治振興会の活動も、２０２０年に新型コロナ感染が世界中に拡散し「コロナとは何ぞや？」国内でも「感染、感染」と世の中の諸活動が停滞してしまいました。感染防止の規制で、世の中の経済・社会も一変しました。そのため振興会の活動も、この２年間、自粛の事態となりました。

しかし、振興会の活動を止めてしまうことはできません。以前同様の取り組みとはいかないまでも、見直しをしながら、地域の活性化を進めてきました。

今までの活動を振り返ってみて、伝統行事「おかげんさん」での提灯行列や打ち上げ花火、料理を食べながらの花火の観覧。地域住民と「ひとは」の仲間との大運動会での昼食うどん、防災活動での土のう作りや担架での人運び、そして運動会の表彰や敬老のお祝いプレゼント。ふれあいの集いでの、力作の展示品、カラオケ発表会、昼食のカレーライスの完食。地域の情報提供誌「振興会だより」の発行など懐かしく思い起こしております。

コロナ感染で集まる事も出来ず、心苦しい２年間。振興会の総会も出来ず残念に思っております。新会長の活動に期待しています。これからの振興会も感染防止に配慮して、長田下地域自治振興会の活動の見直しが求められます。

さらに、新しいパワフルな移住者をむかえての地域づくりも願っています。

そして、隣近所の見守りを大切にした活性化する自治振興会でありたいです。

2022(令和4)年度　長田下地域自治振興会の活動紹介

○縄文の池およびアジサイ園の環境整備
（4/19・5/4・8/31・10/29）

振興会役員・ひとは福祉会の人たちの協力を得て、縄文の池の中の草刈り、アジサイ園及び垣根周辺の草刈り、整備を行いました。ご協力ありがとうございました。

縄文の池整備

垣根周辺整備

アジサイ園整備

縄文の池草刈整備

○土のう作り(6/19)

振興会役員・地域の有志の方・ひとは福祉会の人たちの協力を得て、土のうを作りました。

下長田集会所グラウンド端、長田５区柿林様宅跡倉庫に置いてありますので、必要な時は使用してください。

ご協力頂きました皆様、ありがとうございました。

土のう作り

土のう置場
（下長田集会所グラウンド端）

○敬老事業の実施・友愛訪問活動【ご長寿お祝い】(9/17)

７５歳以上の方（９５名）に、振興会各役員が手分けして、敬老お祝い品（商品券）をお届けしました。また、友愛訪問活動としてご長寿お祝い品（８０歳以上の方６４名）もお届けいたしました。

火上富江様が１００歳を迎えられました。おめでとうございます。

コロナウィルス感染の収束が見えない中、皆様にお会いして、お互いにふれあうことの大切さを実感致しました。これからも、どうぞお元気にお過ごしください。

（K. M）

100 歳おめでとうございます

「ひとはガーデン」オープン

ガーデン入口（丸岡さん撮影）

ドローンからの景色（丸岡さん撮影）

貞近さんのちぎり絵

私の子どもが小さかった頃、ひとはのニワトリに会ってジャングルジムで遊んだ後、ひとは館まで行くのがおきまりの散歩コースでした。月日は流れて散歩コースだった農業空間は、ブルーベリー狩りができる「ひとはガーデン」に生まれ変わりました。

6 月 25 日の一般公開前、地域の人たちへの招待チケットを手に、「ひとはガーデン」に伺いました。観光ブルーベリー園では、びっくりするほど大粒のブルーベリーを摘みました。そして、可動式ギャラリーでスムージーをごちそうになりながら、ガーデンができるまでの 10 年の歩みを映像で拝見しました。

それから 9 月初旬、ひとはの『報道官』伊藤千代子さんとひとはの『現場監督』丸岡洋二さんにお話を伺いました。

6 月のオープン前には、30～40 人の地域の方が来られ、ブルーベリー摘みを楽しまれました。オープン後、市外からも多くの方が足を運ばれました。安佐南区から来られた方は、観光ブルーベリー園は、今まで島根まで行かないとなかったので、近くに出来て嬉しいと喜ばれていました。

完成までの 10 年間、農業班の仲間 9 人と丸岡さんたち職員の方が、農作業の合間に瓦を砕いて敷き、冬場に石畳風コンクリートを手作りされ、素敵なガーデンは誕生しました。

ブルーベリー園には、栽培中の木を含めて 20 種類、約 500 本の木がコンテナに植えられています。また、一面にマルチを敷いたことで、地植えのときに大変だった草取りから解放されたそうです。一方で、地域の悩みでもある獣たちとの戦いは、続いています。今は、鹿よりも新勢力のアライグマが、囲いの網の下をくぐってブルーベリーを食べに来るそうです。

仲間で最年長の貞近幸夫さん（9 月で 93 歳！）は、作業の他にちぎり絵をたくさん作っておられます。11 月には、ギャラリーでちぎり絵の個展を開催されるそうです。

「大人数はまだ少し難しいけれど、ギャラリーを活用して小さなイベントが出来たらいいな。ひとはガーデンを訪れてアイスを食べて、ひとはの日常に触れてもらえたら。」と話して下さいました。今後は、イチゴとブルーベリーの果樹を軸にガーデンを拡張し、丸太を使った子どもたちの遊び場も作られるそうです。

自由自在に模様替えできる「ひとはガーデン」が、どんな四季折々の風景をみせてくれるのか楽しみです。

（T.K）

『長田下地域の文化財保護と伝承』について考える㉛

今回も、家庭に眠っている生活用具（民俗文化財）について、見てみたいと思います。

前号に引き続き、自分のうちの農具小屋に残されていた昔の農具などを外に引き出して、ほこりを払い、ひどく錆びているものは、さび止めのオイルを塗り、きれいにしてやりました。

このたび、犂（すき）１つと馬鍬（まぐわ）２つを見つけました。写真を見ていただくと分かるように、犂は牛馬に引かせて、田んぼの土を耕す農具です。現在の耕運機やトラクターが出現する前までは活躍していました。犂の先端部分に三角形の刃があり、その刃で土を掘り起こしては横に倒していました。刃が折れると、近くの鍛冶屋で直してもらって使っていました。

つぎに、馬鍬（まぐわ）というのは、田んぼの土の塊を細かくする農具です。長さが１m50ｃmほどの木の桁（けた）【小型の方は、１m15ｃm。型式は古い】に、10ｃm間隔に、長さ15ｃmの鉄の歯15本をつけ、その上に鳥居のような取っ手をつけたものです。水田の代掻き（しろかき）に使いました。昭和の中頃までは、わたしたちの地域でも、ほとんどの家に、駄屋（だや）【牛小屋のこと】があり、牛や馬を飼い、その牛馬に、犂や馬鍬を引かせていました。昔の農業は、牛馬や人の力に頼り、とても苦労していました。

下の２枚の写真は、松田清会長が自宅にあったものを写真に撮って、提供してくださいました。１枚は、「大鋸（おおのこ）」、もう１つは「俵締め機（たわらじめき）」です。大鋸は、切り倒した大木を縦に切って、板材にする大型の「ノコギリ」です。今はチェンソーという便利な道具が発明され、楽に切れますが、それまでは、人の腕の力で、時間をかけて木を切っていました。また、俵締め機は、米を入れた俵に藁で作った縄をかけ、きちんと締めて、製品に仕上げる道具です。昔は、どこの農家も持っていました。また、俵やむしろを編む機械も、それぞれの農家が備えていました。

新型コロナの感染拡大により、思いつきでわが家の農具小屋の整理をしたら、思わぬ民俗資料にもなる昔の生活用具が出てきたことは、驚きでもあり、発見でもありました。先祖の人々が、農具を工夫して作り、農作業などの効率を上げようと努力していたことが想像できました。

「振興会だより」をお読みくださった方から、昔の生活用具などについて、感想を聞かせてくださり感謝しています。このほかに、ご家庭に残っている昔の生活用具などを紹介してくだされば幸いです。

（F. T）

犂（すき）

馬鍬（古いもの）　木製

馬鍬（新しいもの）　金属製

大鋸（おおのこ）［松田会長より提供］

俵締め機［松田会長より提供］

発行：　長田下地域自治振興会　　担当：　広報委員会、企画調整部